

島田五空の俳句

五空百句

石田冲秋（元「俳星」主幹）選

▽『五空句集 裘』（昭和五年十月、俳星社）から、元「俳星」主幹の石田冲秋さんに百句を選んでいただきました。

▽俳句は、『五空句集 裘』の掲載順に排列しました。

▽表記は原則として『五空句集 裘』に従いましたが、漢字については常用漢字表にある字体にあらためました。また、適宜、原文にはないルビを付しました。

新年

旭光照波

1 大八洲波の上なる初日かな

2 御降に遠山松の緑かな

3 弓張りて五十の春の力かな

4 忘れぬし袖の薬や三ケ日

5 弓とつて天下に耻ぢず的初め

6 番頭に能書ありけり帳祝

7 水祝覚悟のことに座りけり



12

春雪や譲れば譲る道の傘

11

東風吹けば思ふが中に此翁

鳴雪忌

春

8

なごめ剝戸に庖丁を鳴らしけり

9

川風に一月場所の太鼓かな

10

初灸吉野ふみしも思ひ出に

145票 35票

17票 26票 46票



22

梅雨あがる弦音となりぬ朝の風

96票 22票

21

悼佐々木北涯
俳諧の仏一基やつゆの空

33

巔に我詩埋めん富士詣

16票

夏

20

釣に行く畑の道や豆の花

31票

19

雪の如く李吹きちる厩かな

35票

18

清明の嵐となりぬ鯨風

22票

17

日の木立風の藪原囀りぬ

10票

16

囀や日ざし明るき雑木山

22票

15

歌を見て人なつかしき弥生かな

34票



14

あるがまゝに消ゆるがまゝに残る雪

100票

13

弓道大会
春雨の糸の中なる我矢かな

38票

34

母を失へる我子に
鹿の子はその母もゐて戯るゝ

40票

32

笛の舟太鼓の舟や浜祭

44票

31

脚に吹く振舞水のあまりかな

20票

30

竹婦人枯木の脚をのせにけり

13票

29

水打ての明るさや樹の間の日

20票

28

かしましき市暮れにけり水を打つ

13票

27

麦秋や麻疹病む子の赤頭巾

13票

26

旅衣青田の風に吹かれけり

15票

25

この丘に馬を立てけむ青嵐

24票

金沢柵

24

滝壺に人ある声やはたゝ神

26票

23

夕立や畳に上る山の蟻

39票



43	42	41		40	39	38	37	36	35
月かけて三夜にわたる祭かな	船つけばその妻も来て磯の月 岩館にて	陸を見ぬ船路幾日や天の川	秋	蟬涼し耳にとゞまる故人の句 美代女墓前	山風や座に吹かれたる夜の蟬 露月庵	鮎焼くや火を煽る風峰よりす	不受不施の一寺存しぬ閑古鳥 ふじゆふせ	唇に末期の水よほとゝぎす まつご 長女レン天す	酔臥して其角は知らず時鳥 よいふ はしとあきす
121票	23票	37票		17票	50票	34票	14票	31票	22票

55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44
舟中や指さす山の秋の色 男鹿	新涼や樹の影ひたす波の色 十和田湖	新涼や机の前の山一座 しんりよう やまいちざ	山遠近初秋の雨晴れ易き やまおちこち	秋山やわが登る道一筋に	寄り慕ふ一つ心や秋の声 露翁追悼	ふと覚めし耳疑ふや秋の声	大空に月の小さき野分かな	日蓮を市に曳行く野分かな ひき	ほつくと野の花白し初嵐	松ばかり影なす庭や十三夜	わが舟の真上の月となりにけり
25票	30票	10票	11票	28票	11票	49票	51票	10票	52票	55票	41票

68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56
絶えである俳一脈や虫の秋 洪取会へ	句座の灯の草に及ぶや虫の声	忌み明けや巷の燕すでになし ちまた	野の茶毘に人の屯ろや鳥渡る たび	水に抛り樹に抛り鳥の渡るかな よ	雁にさめて又濤音の枕かな なみ	松黒く岬晴れたり雁の棹 さお	月缺けぬ田の水落つる草の中 か	新そばや老健かに親二人 すこや	遠鳴子羊集めの笛も鳴る とおなるこ	踊る中にその人もかと頼冠 ほおかむり	瓜の馬茄子の馬に後れけり おく	鬼貫忌酒に長座の二三人 おにつらき
11票	11票	11票	14票	23票	4票	7票	27票	35票	1票	17票	22票	32票

79	78	77	76	冬		75	74	73	72	71	70	69
冬川や舟を叫べば鳥の立つ	霜の夜や渡りおくれし雁二つ	雪掘れば的現はるゝ朶かな あづち	木枯の池も見え透く木立かな			から風に乾く田面の落穂かな	茸狩やかねての場所と独行く ひとり	多賀の碑へ路一筋や草もみぢ みち	せゝらぎに或は遠き河鹿かな	暁の枕に近き河鹿かな	翠巒の影水にあり河鹿啼く かじか	蓑虫や俳三昧の耳の底 みのむし
44票	59票	29票	34票			39票	8票	8票	30票	21票	54票	11票

92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80
大根引いてこの日和ある山河かな	狼をのがれて淋し山の月	網代守わが影水に老しかな	妻と我沢庵五十ばかりかな	鏡中にわが髯白し裘	一山の塔堂古りぬ冬構	笛急に霰もおろす燎火かな	神帰りこの里人に事もなし	帰ります神ねぎらひの祝詞かな	鉋屑風がもてくる師走かな	筆すて、師走の暇もつ身かな	鶏買に鶏唄ふなり小六月	大寺の影落つ庭の冬日かな
28票	75票	5票	9票	22票	6票	10票	31票	24票	16票	20票	13票	14票

100		99	98	97		96	95	94	93	
枯つたと細り行く身や風の音	絶筆	眼中の面貌消えず秋の声	南瓜忌とこれより称ばん秋の風	子規の後三十年や秋の風	露月翁逝く	残菊に帰庵の笠を干す日かな	人住みて煙上げたり冬の山	山影を机に曳くや暮早き	波もなし秋をきはめて海の色	西遊句録
67票		33票	24票	16票		7票	40票	17票	97票	